

一 茶 の 周 辺

——春耕、可候のこと——

松 尾 靖 秋

今夏わたくしは機会に恵まれて、早稲田大学の安藤常次郎教授その他とともに、一茶の門人久保田春耕及び滝沢可候の、それぞれ後裔を訪ね、一茶周辺の事情についていささか得るところがあった。ここにその報告の意味をかねて一文を草してみたいと思う。

一茶が郷里柏原を中心として幾人かの門人を得、いわゆる一茶社中を形成したのは、彼の生涯にあってはむしろ晩年のことに属する。一茶が年少のころ、安永6年15歳のとき故郷を去って江戸に出、寛政3年29歳のとき久しぶりに故郷柏原に帰り、その後享和元年39歳のとき再び柏原に帰省、更に文化4年、45歳のとき柏原に帰ったことが知られるが、これらはいずれも短い期間の帰郷であり、一茶の故郷における活動には見るべきものがなかったようである。文化4年の帰省の折、柏原に着いたのは11月5日のことであるが、折から雪深い郷里に帰ってみると、自分を受け入れるべき肉親にしても、もはや温かく受け入れるような存在ではなく、村人たちも彼を決して快く迎えることがなかったとみえて、

雪の日や古郷人のぶあしらひ

の句を吐いているところをみると、故郷にながく滞在するということは、一茶にとってはやも無用のことであり、苦痛でもあったにちがいない。しかし彼とても江戸におけるながい漂泊の生活を思うと、やはり故郷忘じがたしの感のひとしと胸に迫るものがあつたのであろうが、文化6年の帰省の折には柏原を中心としてその周辺に足跡を印し、郷里における自己の活動の世界を得るために力を注いだように見受けられる。小林計一郎氏の調査によれば、そのときの帰省の経緯は次のようである。(同氏著『俳人一茶』)

その年4月5日江戸をたった一茶は、9月善光寺松屋に泊り、11日は母の実家宮沢家のある二の倉に着いた。それから舟岳(信濃町)・毛野・長沼・江部・六川・紫などの門人の家を廻り、5月8日漸く柏原に入って桂屋(中村二竹宅)に入っている。しかし生家に帰る意志のなかったものか、柏原には3泊しただけで再び門人宅を訪ねることにもっぱらで、17日には柏原の生家の東隣であつた園右衛門宅に泊り、翌日は

一 茶 の 周 辺

借家に入っている。更に8月15日には長沼の門人村松春甫と姨捨山に仲秋の名月を見に行っている。この年の一茶の活動にはめざましいものがあり、小林氏によれば、北信濃の一茶社中はこの年にほぼ形をととのえたといつてよいとされている。六川の門人達、長沼の連中、紫の久保田春耕、善光寺の上原文路など、いずれもこの年の日記に登場する人々である。

ところで一茶が久保田春耕の家を訪ねたのは、前記小林氏によればこの故郷滞在中の4月25日が最初のこととされ、5月2日まで同家に滞在している。文路とともに春耕を同門に加えたことは、一茶にとってその後の活動の上で何かと大きな力となったであろうことは想像にかたくない。

特に久保田家のことが日記に散見するのは、文化11年から同15年にかけての、いわゆる『七番日記』である。日記では「紫ニ入」としか書いていないが、瞥見しても文化7年6月9日、同12年4月9日、同13年閏9月7日、同14年8月1日、同年11月9日、同15年4月4日、同年5月3日、同15年8月5日、同年12月20日、という具合にその訪問の記事が見えるが、同地には4、5日にわたり滞在した日もあったようである。

久保田春耕家は、いま長野県須坂市の東方約4キロのところ、長野県上高井郡高山村紫にある。当主久保田ひろし氏によると、一茶時代は一村の耕地の大部分を所有した大地主であったようで、現在の邸内の家屋のたたずまいや裏手一帯にひろがる果樹園には、かつてのおもかげをしのぶに充分なものがある(挿図2)。家屋内の客間には、侵入者に備えた脱出口が設けられていて、直接にねり堀の外に抜けられるようになっているところなどは、豪農の家屋としてさすがである。裏手には一茶の宿泊したという土蔵づくりの家が現存している(挿図1)。

同家には著名な『父の後焉日記』をはじめとして、多くの句帖類(挿図3)、句日記、屋根葺き用の板の薄片に記した句など真蹟類(挿図4)がおびただしく所蔵されているが、中でも出色のものは、一茶の春耕あて書簡であろう(挿図5)。これは一茶の最後のもので、文政10年閏6月15日の日附を有する。一茶は同年11月19日歿しているので死歿前約5箇月のものであるが、その筆蹟の乱れには、さすがに体力の衰頹におもむいた一茶を偲ばせるに充分のものがある。その文面は次の通りである。

御安清奉賀、されば私ハ丸やけに而是迄参り候、此人田中へ参り候、御とめ可被下候、右申入度、かしく

壬六月十五日(不明)

土蔵住みして

やけ土のほかりほかりや蚤さはぐ



図 1 一茶の宿泊したと伝える家屋



図 4 真 蹟



図 2 久保田家正面

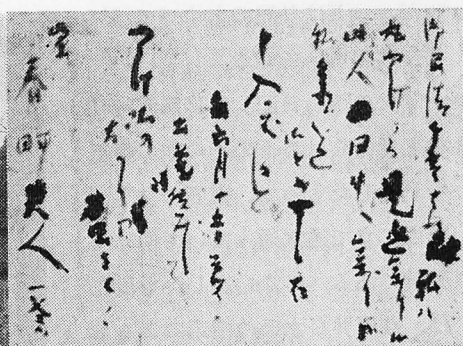


図 5 春耕あて書簡

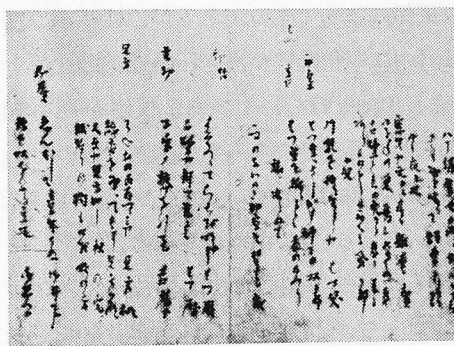


図 3 句 帳

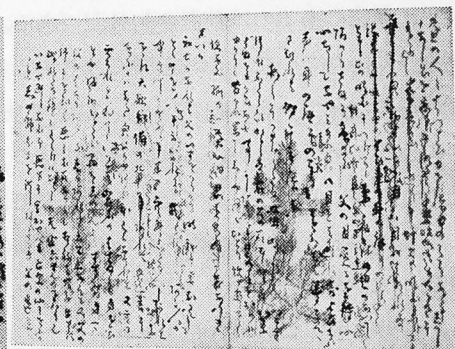


図 6 父の終焉日記

紫

春畊大人

一茶

同年閏6月1日、柏原に大火があり、一茶宅も類焼したので、彼は焼け残りの土蔵に仮住まいをし、その後11月19日歿するまでそこに居たのであるが、この書面は類焼直後のものであり、いち早く春耕にその旨を連絡したものとみえる。その意味でもまことに貴重な書簡というべきであろう。なお「春畊」の文字は「春耕」が正しいが、一茶は日記にもすべて「畊」の文字を用いている。

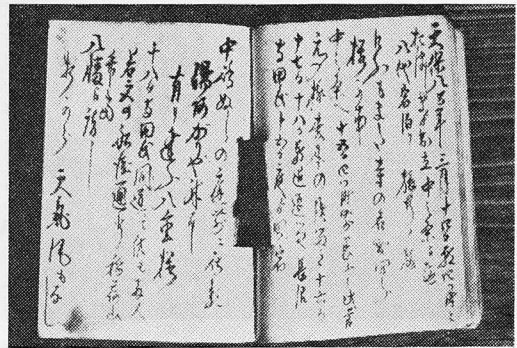
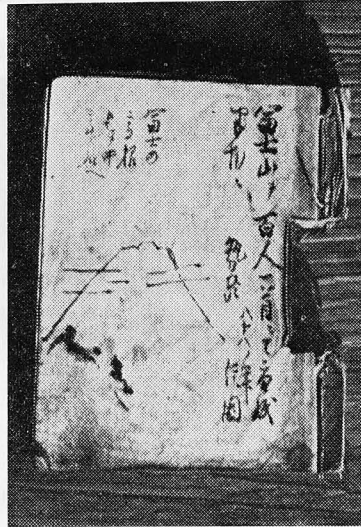
『父の後焉日記』は葛飾派歳旦帖と考えられるもののその他の裏紙を利用したもので、表面の文字が裏面にまで透き通っていて極めて難読である（挿図6）。しかも現在は、荻原井泉水氏の指示によるものか、法帖仕立てにしつらえられ

ていて、一枚一枚が裏打ちされているために、表面の文字を正しく確認することが一層困難となり、資料として取扱う場合、そのことがまことに惜しまれてならない。

更に興味のあるのは前記の句日記である。天保のころのものであるが、柱のところがくりぬかれていて、これを開くとちょうど真中に四角な穴があき、墨壺が出るような仕組になっている（挿図7・8）。左手で矢立と句帖を持ち、そのまま文字を認めるのに極めて便であるが、これは一茶独特の工夫というべきであろう。膨大な数の句を記した一茶にしてはじめてなしうる工夫であったと考えられる。

さて次にとりあげねばならないのは可候のことについてである。可候の家は現在長野県 上水内郡三水（サミズ）村赤塩毛野にあり、現在は滝沢寿枝氏が住んでおられる。信越線牟礼駅の東方約4キロのところにあり、久保田家の紫とは千曲川をはさんで対蹠的に位置する。

図7・8
句日記



同家に伝わる一茶資料は可候にあてた一茶書簡一点のみであるが(挿図9)、同家の系図によれば久保田家と滝沢家とは姻戚関係にあったことが知られる。一茶はこうしてさまざまな関係をたどりながら、地方の有力者を巡歴することを専らとしていたものであろう。

系図(挿図10・11)によれば、同家9代にあたる善右衛門は文化14年に59歳で歿しているから、一茶がしきりに滝沢家を訪ねた文化9年はその54歳にあたり、一茶はときに50歳であったから、年齢的に見て友人としては矛盾を感じさせないが、次の第10代嘉三郎は天保9年58歳で歿しているから文化9年には31歳で、一茶の門人として考える場合はこの方が年齢的に見てふさわしいようでもある。あるいはこの嘉三郎が可候であったとする方が妥当であるかもしれない。またその妻艶は久保田家から嫁していることが知られるので、いっそうこの方が可候であるという可能性は濃厚となると考えられるのであるが、さて、試みに『七番日記』を検してみると、文化9年7月から同10年12月までに「毛野入」と見える記事が10数回にわたって見え、更に同11年正月から15年12月までには約20回にわたって見えている。しかもそのたびに少いときでも2、3日、多くは4、5日にわたって滞在しているのであるから、一茶がいかに足しげく知人・門人の間をわたりあるいたかは想像にあまりあるものがある。月に1回は普通のことで、多いときは2、3回の訪問もあったようであるが、前記小林氏によれば、文化10年は外泊が約300日で在宅がわずかに70日たらず、翌11年では外泊が約280日、在宅が70日余、その他の年でも概ね外泊が1年の3分の2を占めているのであるから、一茶の日常はおよそこうしたものであったと想像することが出来る。しかし一茶の場合、家を留守にしていたとはいうものの、留守居の妻には家庭のことに関して実にこまごまとした指示を忘れなかった。そうしたところにも一茶の人間性が垣間見られて微笑を禁じ得ないものがあるが、その意味で最後にここで一茶の一通の書簡を取りあげそれについて考察を加えておきたいと思う(挿図12)。

この書簡はかつて私が紹介した(岩波書店『日本古典文学大系』第58巻月報、昭和34年4月)文政5年2月9日附、妻菊女に与えたものである。これは古短冊の蒐集家として知られた故南大曹氏の旧蔵にかかり、現在早稲田大学図書館蔵のものである。まずその全文を掲げることとする。

御安清被成候哉されど是より田中へ参りて卅日迄ニハ道もかたまり可申候間帰り
申度候

一 庭の椿雪消候へばいたミ申候間わらなりとも孤なりともかぶせて霜よけ頼ミ入
候

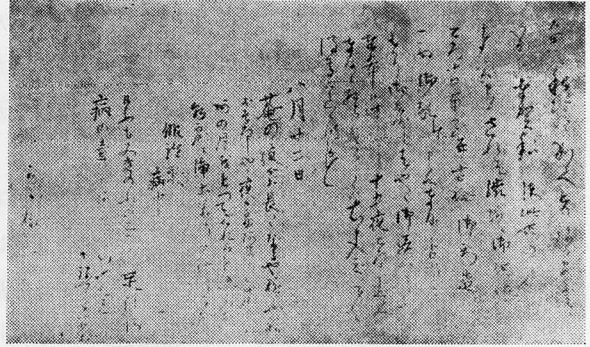
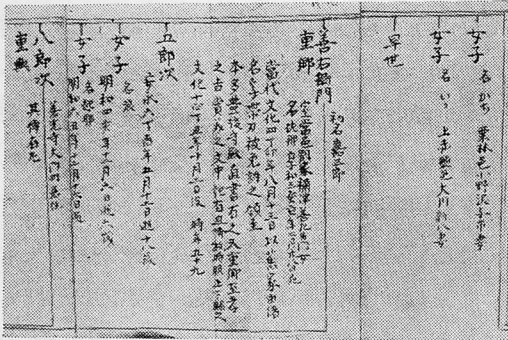


図 9 可候あて書簡→



←図10 滝沢家系図

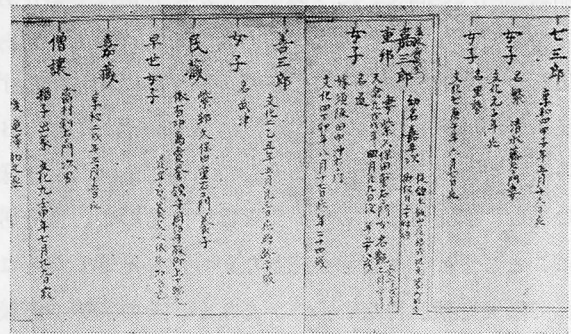


図11 滝沢家系図→

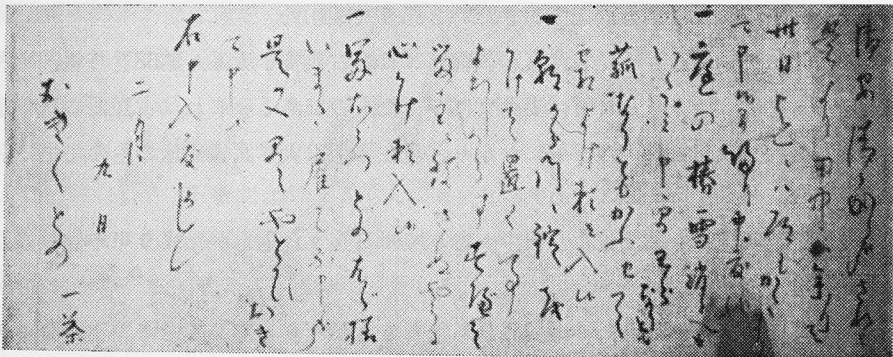


図12 一 茶 書 簡

松 尾 靖 秋

一 朝から門々錠をかけて置く事よろしからずすべて留守ニ致さぬやうに心がけ頼
入候

一 富右衛門どのは^(ママ)様いまだ雇ひ不申候哉是又早々やとひおき可申候
右申入度 かしく

二月九日

一 茶

おきくどの

上のような文面である。執筆年代については、一茶がきくを妻として迎えたのは、文化11年4月11日のことで、彼女は文政6年5月12日に歿しているから、それまでの前後9年間が検討の対象となるわけである。右の文中「是より田中へ参りて」の「田中」は、いうまでもなく湯田中のことで、同地には湯本希杖が居り、一茶は因縁の浅からぬ土地である。こうしたことをよりどころとして、日附の2月9日を中心に日記に逐一検討を加えると、『九番日記』の文政5年2月の条に、次のような記事のあることが知られる。

四晴 ^(浅野)アサノニ入 正見寺有法談

(中略)

八晴 六川梅松寺ニ入 昼ヨリ陰寒

九晴 夜 春畊来

十雨 巳刻晴 林ノ内左兵衛ニ入未刻雪三寸積

(中略)

三(十三日一筆者注)

晴 矢嶋西江郡 西条中野陽一見其翠同道^(夜間瀬)ヨマセ岩屋上条通 田中へ入 希杖留守

四晴 夜雪 其翠来

即ち日記によれば、彼はこの年2月はじめ柏原を出て、上町から浅野を経、8月に六川の梅松寺に至って、ここに宿り、10日出発、13日には中野から夜間瀬・上条を経て湯田中に至っていることがわかる。従ってこの書簡は、六川梅松寺に滞在中に書かれたものであろう。

湯田中に来てみると、日記にあるように、希杖は留守であった。希杖は、知られるように湯田中温泉の湯元で、姓は湯本氏、通称を五郎治といい、巢鶯居と号した。一茶より1歳年長で、宝暦12年生れ、天保6年74歳で歿している。その子其杖とともに一茶に傾倒するところがあったと伝える。故栗生純夫氏によれば、田中川原に如意の湯という別荘を建て、これを一茶滞留中の起居にあてたという。一茶には、

田中川原如意湯に昼浴して

一 茶 の 周 辺

なを暑し今来た山を寝て見れば

の句がある。日記によれば、彼は15日にこの地を出発しているが、20日には再び湯田中に到っている。前回是不在のため希杖に会えなかったところから、再び同地に赴く気になったものであろう。なお、9日の記事によれば春耕が梅松寺に訪ねていることが分る。かくして彼は27日柏原に帰ったが、3月初旬は殆ど在宅している。3月10日3男の金三郎出生というような家庭の事情が、彼の留守を許さなかったためであろう。書簡に見える「卅日迄には云々」という言葉も、そうしたことについての一茶の心づかいが察せられる。また「富右衛門どのはば様（婆様であろう）云々」というのは、きく女の出産前後の手伝いとして雇い入れようとのことをいったものであろう。日記の3月14日の条に「富右衛門雇」とあり、これが実現したことが知られる。以上種々の関係を考へて、この書簡は、前記したように文政5年のものであると断定して差支ないものと思われる。

ところでこの富右衛門なる人物は、その後間もなく一茶との間に確執を起す結果となった。彼は柏原に近い赤沢村の人で、一茶とは旧知の間であつたらしい。文政6年2月下旬から3月にかけて妻きくが病気がちになって、幼児の扱いに手をやいた一茶は、富右衛門の好意ある申し出を信じて、4月中旬、金三郎を彼の許にあずけた。ところが、ついで5月13日、遂にきく女が亡くなったので、せめてその野辺送りにもと、金三郎を呼びよせてみると、意外にも幼児は骨と皮ばかりに痩せ衰えて、息もたえだえで見るに忍びない姿となっていた。富右衛門は養育料を目あてに子供を引取り、その後は乳も飲まさないで、水ばかりで育てていたというわけであつた。そのいきさつを知って一茶は激しい怒りに燃えた。そうして綴ったのが、書き出しを「おくのはそ道」の黒髪山の条に模した富右衛門筆誅の一文である。その文中には彼の烈火のような憤りが余すところなく語られている。人一倍小煩悩であつた一茶にしてみれば、その怒りと悲嘆とは想像を絶するものがある。ともかく、芭蕉の書簡のような、いかにも高踏的なものに比べて、一茶のそれはまた何と人間臭を発散しているとか。これはまた一茶文学の全般に通ずるものであり、更に魅力でもあること、また言を俟たないというべきであらう。

今夏の調査にもとづいて春耕、可候の周辺をさぐり、更に一茶の旅中のあり方をも推察させるものとして、私がかつて紹介したことのある書簡一通を提出し、それにいささかの考察を加えたものであるが、早々の間に認めたものであり、読みかえしてみるといささかの不満がないでもない。一応の報告書として提出する所以である。

附記 本稿は昭和四十四年度特別研究費による調査にもとづくものである。

(まつお やすあき 本学教授・日本文学)